

私の英語史——学生時代をふりかえって

国際教育総合文化研究所

(所長・寺島隆吉)

2013年度研究員・課題小論文

山田昇司(朝日大学)

0. はじめに

1. 中学以前

- 1.1. アルバムの中の英語教師
- 1.2. 「君は正直さんの息子さんか？」
- 1.3. 〈出る杭〉の疲労感
- 1.4. 穏やかでやさしくて…
- 1.5. 「そんな所へは行く気がしなかった」
- 1.6. 報じられないものを見抜く力

2. 中学・高校時代

- 2.1. 思春期と「ミャップ」
- 2.2. 〈思考実験表〉のルーツ！？
- 2.3. バルジャンの〈神〉、私の〈天と地〉
- 2.4. 〈英語の神様〉に憧れた私
- 2.5. ビリから二番目の名前

3. 大学時代

- 3.1. 初めて外人を笑わせる
- 3.2. 「トゥエンティトゥスリー」の謎
- 3.3. 我が名はローイ
- 3.4. 「そんなものは使わなくとも…」
- 3.5. 美味しい単語は忘れない
- 3.6. いくら縁が無いとはいえ…

4. おわりに

今後の研究課題として

1. 英語にとって「題材選択」とは何か
2. 英語にとって「協同学習」とは何か

0. はじめに

私は2013年度の「国際教育総合文化研究所」研究員の申し込みを受理されましたので、これからその課題小論文「英語と私」を書きます。このテーマについては私は最近まとめた原稿の中において既にその一部を論じましたが、「中学以前」「中学・高校時代」についてはまだ書いていませんでした。そこで本論ではその時代に焦点をあてて記述します。

1. 中学以前

1.1. アルバムの中の英語教師

私の英語史を語るには自分の父親のことから始める必要がある。父親が中学校の英語教師をしていたからである。私が英語教師になろうとしたのにこの影響があるのは間違いない。親戚の人からよく「しょうちゃんはお父さんみたいに先生になるんやろ」と言われたことを覚えている。

ただ父親が学校に出かけたり家で英語教師としての仕事をしている姿は私の記憶にない。というのは、私が小学校1年生のときに病気で仕事を続けられなくなったからである。もちろんのアルバムの中の写真でその姿を見たことはある。その写真の中でも丸眼鏡をかけ筆記体を書いた黒板を背にしてポーズを取って写っているものが印象に残っている。

このアルバムは少し前に母が処分してしまって今は手元にはないので記憶を頼りに書くのであるが、一枚の新聞記事がこの中に挟んであった。記事には父のクラスの女子生徒が家庭の事情で小さな妹を学校に連れてきていて担任の父はその子を教室に入れ給食を食べさせるなどしてその女子の面倒もみていたという内容だった。その記事の日付はもう分からないが、おそらくは1960年前後のことではなかったかと思う。アニメの『トトロ』でメイがサツキの教室にいた場面を見るといつもこの記事のことを思い出す。

父から英語を教えてもらったという記憶はないのだが、次のことを教えてくれたことは覚えている。日本語の一人称の様々な呼び名がひとつの単語から出て来ているという話である。watakusi「わたくし」から、watasi「わたし」、wasi「わし」、assi「あっし」、atasi「あたし」、atai「あたい」が説明できるというのだ。おそらく父が何かで読んで得た知識だったのだろうが、私は言葉の不思議なしくみを見せられたような気持ちがあった。

もうひとつははっきりと覚えていることがある。高校1年のはじめのころ私は帰宅してからテレビの前に長々と居座って勉強に取りかかる時間が遅くなっていた。だから寝る時間が遅くなって朝なかなか起きられず遅刻することが多くなっていた。通知表を渡されたときに出欠の備考欄に「49回」とあって青くなったが、これは「チ9回」の見まちがいであった。しかしいずれにしても遅刻を前期だけで9回していたということだ。この件で父に厳しく怒られたときに私は腹立ちまぎれにテレビの線をペンチで切ってしまった。それでそれ以降は私は自分の部屋に入って机に向かわざるを得なくなった。この叱られた経験は恥ずかしいので本当は書きたくなかったが、父の鮮明な思い出なので書くことにした。

1.2. 「君は正直さんの息子さんか？」

父が中学教師を務めたのはわずか 14 年間でその後は病氣療養を続けていたが、私が 32 歳のときに 60 歳で他界した。その頃のことだったと思うが、私はある先生から「君は正直（まさなお）さんの息子さんか」と言われたことがある。そう言ったのは広瀬康先生である。広瀬先生は当時の岐阜の新英研サークルの中心的なメンバーのひとりであった。仕事を辞めて 25 年も経つ父のことをどうして覚えていてくれたのだろうか。そのときに広瀬先生にその頃のことをもっと伺えばよかったと悔やまれる。

広瀬先生については別の思い出もある。ひとつは授業を見せてもらったことである。阿部隆子先生といっしょに勤務校の垂井北中学校にお邪魔した。広瀬先生の低くてよく通る声が教室の響いていたことが懐かしく思い出される。このときにはもうひとりの著名な先生にもお願いしたのだが、こちらは引き受けていただけず残念だった。この頃の私は他の教師の授業も見て自分の授業と比較してみたいという欲求が生まれていた。自分の授業を記録するようになって授業を見る目が力がだんだん付いてきたからかも知れない。

寺島美紀子先生の授業を見せてもらいに石川県の松任農業高校まで伺ったのもこの頃であった。当日は東京大学教育学部の先生や学生たちも来てビデオ撮りを行い放課後にそれを見ながら合評会が行われた。このときの美紀子先生の授業については『英語記号づけ入門シリーズ⑥ Story of a Song』第 5 章にその記録がある。久しぶりに読み返してみて「日常の授業構造の解明こそが…」というフレーズが目にとまった。毎日くり返される平凡な授業をどのような組み立てているのか、そしてそこでどんな学力を付けているのか、さらにそれは節目に来るクライマックスにどう繋がっていくのか—そんな観点でいまいちど現在おこなっている自分の授業を見直してみたいと思った。

もうひとつの広瀬先生の思いでは、寺島先生が岐阜に来られて間もない頃のことではなかったかと思うが、新英研サークルの数人の立ち話の中で「あのリズムよみというのはなかなか面白そうだ」と言われたことである。この頃わたしは記号づけ実践に大きな魅力を感じて自分の授業にどんどん取り入れ始めていたのだが、新英研サークルの中には懐疑的な人もいた。そんな中で一番のベテランだった広瀬先生がそんなふうに言われたので心に残っている。（なお、広瀬先生は退職後には地元・垂井町の革新系議員を何年も務められた。先生はいま 80 歳になっておられるはずだが、お名前をネット検索したらお元気そうな姿が出てきてとてもうれしかった。）

1.3. 〈出る杭〉の疲労感

次に私が広瀬先生の授業を一緒に見に行った阿部隆子先生についても書いておきたい。阿部先生の名前は記号研に最近入られた方のご存じないと思うが、寺島先生が最初に実践記録を出版するようにと勧めた人である。彼女は岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発センターというところで 1 年間にわたって研修しその結果を 150 ページの冊子にまとめている。私は寺島先生にこの冊子を読んだ感想を聞かれて「寺島先生の本より分かりやすい」と評したら寺島先生はこの言葉をそのままニュースレターに載せてしまわれた。私はその

とき初めてこの評は寺島先生に対して失礼な言い方であることに気づいた。

しかしこのことをいま振り返ってみると、当時の私には寺島理論をしっかりと理解する日本語力と実践経験がまだ不足していたのではないかと思える。それに対して阿部先生は寺島理論をご自身の豊富な実践体験をふまえて自らの言葉でかみ砕いて説明されていたので「寺島先生の本より分かりやすい」という言葉が私の口から出てきたのであろう。

この冊子にある「S 君の『記号づけ』ノートから学ぶ」の一部分は『英語にとって「文法」とは何か』(pp.166-168)に引用されている。この記録は美紀子先生の『英語「授業」への挑戦』(pp.187-188)とともに完了形認識の寺島仮説(「文法とは何か」 p.136)を支える実践となっている。当時の二人の実践は have を「もつ」ではなく「ある」としていたが、「左半マルの have が完了形の標識になり右半マルと副詞によって意味が分かる」ことを立証したものだ。なお現在は、完了形は「have(もつ)+en(～られて)」という公式になっていて相と態の関係が統一的に説明されている(「Tense・Aspect・Voice の認識と指導」寺島・寺島美 2009)。

また阿部先生は『英語にとって「教師」とは何か』第3章で「2人の有能な女性教師」として言及されている教師の一人でもある。この中で寺島先生は阿部先生を退職に追い込んだ疲労感の要因として「同僚への対応」をあげている。自分の授業がうまく行き始めてゆとりが生まれると同僚の授業指導の「あら」が目について仕方がなくなる、しかし同僚を(ましてや学校を)変えることはほとんど不可能である—そんな思いが彼女にはあったのではなかろうかと寺島先生は述べている。私は阿部先生がこの冊子の出版をためらわれたのも同僚への対応(配慮)からではなかったかと思う。さらに「出る杭」となると職場に居づらくなり「疲労感」がさらに高まることを懸念されたのではなかろうか。

1.4. 穏やかでやさしくて…

阿部先生の思い出にはこんなこともある。「私にはそんな指導はとてできません」と言われたことだ。そのころ話題になっていた『はばたけ青春貴族』(1985, あゆみ出版)という本の感想を私がお尋ねしたときのことである。この本は高教組が編集したもので岐阜県下で著名な4人の先生の教育実践記録が載っていた。そのひとつに荒れた工業高校で生徒と向き合って格闘している教師の話が書いてあった。その教師は生徒を説得する際にそばの椅子を蹴っ飛ばして迫ったという記述があったのだが、そのことを指して阿部先生は上記のように言われたのだった。

私はそれまで「それぐらいの気迫もときには必要だ」と思っていたので阿部先生の言葉は少し予想外のものだったが、同時にそのとき初めて多くの男性教師が無自覚に行っているであろう「力の威嚇」の存在に気づくことになった。私は手こそ出さないようになっていたがときどき「大声」という武器を使うことがあったからである。それからは記号研の会合で阿部先生にお会いするときには、先生の記号づけプリントだけでなく学級通信もお願いしてもらっていた。その通信に使われている言葉がとても穏やかでやさしくて、阿部

先生がクラスの子どもたちに語りかけている様子が目に浮かぶような気がした。

1.5. 「そんなところへは行く気がしなかった。」

私は自分の英語史を中学教師であった父親のことから語り始めたのだが、話が途中で「小学校時代」から一挙に30年後の1990年前後（私が記号研の実践を本格的に始めた工業高校の頃）にまで飛んでしまった。ここでまた時間軸を私の小学校の頃に戻して記述を続ける。この節で述べることは「英語と私」というテーマと直接には関係ないが、最近の「生活保護」に関する政治動向を見ていて書かずにはいられない気持ちになった。

父が病に倒れてから母は近くの町工場へ働きに出た。鋳物を作る作業場で針金を曲げたり鋳型に砂を流し込む仕事をしていた。そして日曜日になると私と妹を近くの親戚の家へ預けて父の入院する名古屋の病院に行って洗濯などの身の回りの世話をしていた。それからしばらく経って父は半身不随の身ではあったが自宅に戻れるようになり、母は知人の勧めもあって飲食店を始めた。私が小学校6年のときである。

この店は思いのほか繁盛して私たちは経済的な窮地から逃れることができたのだが、そこにたどり着く前に母は民生委員の人から生活保護を受けるように勧められている。母は「そんな恥ずかしいことは嫌だった。役場に行くと貯金から何から全て調べられるのでそんなところへはとでも行く気にはなれなかった」とその当時の心境を語っている。

この私の母のようなケースを国連の社会権規約委員会は「恥辱のために生活保護の申請が抑制されている例」と見なしていて、その解消の手だてを講ずることを日本政府に勧告している。また申請はするものの門前払いされて餓死や孤立死に追い込まれる人も少なく、資格があって利用している人の割合は日本の場合はわずか2割にすぎないという。（日弁連『Q&A 今、ニッポンの生活保護制度はどうなっているの』全7頁）

そのような状況があるにもかかわらず、実際は受給額全体の0.5%しかない不正受給問題だけが大大にメディアで報じられて、それと機を合わせるようにして生活保護基準を厳しくする法案が国会に提出された。この法案はさきごろ廃案となったが、社会的弱者に緊縮財政 *Austerity* の矛先を向けるとはいったいこの国の政府は何を考えているのか。（追記：消費税も全ての人に「平等に」負担がかかる点で弱者に *Austerity* の矛先が向いている。「一律に減税する」という考え方も、どの人も同じ割合で「平等に」減税されるので金持ちほど得になる。税金を免除されている社会的弱者には全く恩恵はない。よってこれも *Austerity* の矛先の向きは同じである。）

1.6. 報じられないものを見抜く力

メディアの報道についても述べると、彼らが報じた不正受給が事実であることは嘘ではないだろう。しかし気をつけなくてはならないことは、彼らは「資格があって利用している人の割合は日本はわずか2割」という全体像を見せないのだ。調べる気さえあればそんなことはたやすく分かる。先にあげた日弁連の資料はネット上に出ている。英語教師はこ

とばを教える教師のひとりとして、メディアが使う言葉の嘘を見破るだけでなく、メディアが報じない社会構造をも見抜く力が必要ではないだろうか。

この話を書いておこうと思ったもうひとつの理由は、寺島先生のブログ『百々峰だより』(2013/06/18)で「緊縮財政は殺人的行為だ How Austerity Kills」という記事を読んだこともある。「医療・福祉への1ドルは3ドルの経済成長」「1オンスの予防は1ポンドの治療に匹敵する」という考え方は目先の利益ではなく物事を少し長い目でみることを教えている。私は以前に医療費を無料化した自治体の総医療費が減ったという記事を読んだことがあるが、大病にかかるまえに受診するからだという。教育にかけるお金についても同様である。M.ムーアがウイスクンシン州マジソンで行った演説で「若い世代によい教育を与えることで、次世代に発明家、起業家、科学者、思想家などが生まれる。彼らの新しいアイデアが起業、雇用を生み出し税収が増加する」と語っていたことを思い出す。(追記：この「目先ではなく少し先を見ること」については、自分に身近なことほどそれを実践するのはなかなか難しい。例えば、英語教育。もっと難しいのが自分の子どもの教育である。)

2. 中学・高校時代

2.1. 思春期と「ミャップ」

さてここからは中学校と高校のときの「英語と私」について書く。最初に「発音」についての思い出を記す。自分の頭の中にある無数の記憶の中から、不思議なことに、2つの単語の発音のことが思い出される。

ひとつは中学のときに教えてくれた山本先生の *girl* の発音である。30歳ぐらいで黒縁メガネをかけた小柄な人だったが、私はその先生の顔とともにその単語の「*ir*」の響きが蘇ってくる。そのレッスンの単語復誦のあとにはおそらくは本文のコーラスリーディングがあったのだろうが、その単語の響きだけが不思議と耳に残っている。

高校では「ミャップ」という発音が思い浮かぶ。この先生は *map* という単語の母音の発音をみんなにわかりやすいように少し誇張してそう発音されたのが、クラスメートに先生の物まねが上手な男がいて、その先生の授業の前にはよく「ミャップ、やってくだせえ」と言ってみんなを笑わせていた。その先生は生徒を指名するときにも「次の人、やってください」と言うのであるが、語尾の「さい」が「せえ」にも聞こえるときがあったので、彼は「ミャップ」と組み合わせてが、持ちネタを作ったのである。

このふたつのエピソードについて考えると、当時の英語教師が微妙な母音の発音の差異を教えることに力を入れていたこと、また中学のときはなんのためらいもなく復誦していた生徒が高校生にもなるとこのような発音練習に何かしらの不自然さ、気恥ずかしさを感じ始めるようになることが分かる。それゆえに彼の物まねは受けたのであろう。

もうひとつ「発音」の思い出を記しておこう。三年生のときのことであるが、当時の校長先生が退職されるにあたって最後の英語の授業をしに私たちのクラスに来られた。この

とき校長先生は教科書とは別の英文を持ってこられたと記憶しているが、自分で和訳してから生徒を指名して音読させていた。クラスで最も英語ができると言われていた谷口さんという女子生徒がきれいな発音で英文を読み上げ、校長先生が褒めたことを思い出す。彼女が読んだ英文の中にはもし自分が指名されたら読めなかった単語 **appalling** があってその後で辞書を見た。これは彼女みたいに上手に読めればいいなあという羨望の記憶である。

2.2. <思考実験表>のルーツ！？

中学校のときに通っていた塾の思い出もひとつ書いておこう。塾とは言っても檀家の子どもたちを集めて、高校の先生をされていたお寺の住職の方がわずかばかりの月謝で教えておられたものだった。週に2回夜7時から9時までの間、英語と数学を教えてもらっていた。いつも最後に数学の問題が1つ出されてそれができた人から終わりというふうになっていたが、私は最初の頃、因数分解の「たすきがけ」の要領がよく飲み込めずに苦戦していたのを思い出す。いつも臼井君という子が一番に合格をもらって帰ったものだった。

英語について言うと、いつも授業の最初には細長い横長の紙が配られて文の書き換え練習をしていた。たしか左上に先生が板書した「肯定文」を書き入れてから、その横に否定文、その下に疑問文、そして右下の枠には「否定疑問文」を書いたように記憶している。いまふりかえてみると、この練習のおかげで **be** 動詞、一般動詞、進行形、受け身形、完了形などの動詞形が間違わずに書けるようになった気がする。このドリルは今わたしが授業で使っている「相と態の思考実験表」のルーツのようにも思える。

2.3. バルジャンの<神>、私の<天と地>

中学校の思い出と言えば、卒業式のときに聞いた校長先生の言葉を思い出す。その言葉とは「天知る、地知る、我知る」という言葉だった。どうしてこのことを思い出したかという、いま私が授業の教材に使っている『レ・ミゼラブル』の主人公ジャン・バルジャンの生き方に通じるものを感じたからである。誰もあなたを見ていなくとも自分のことは自分が見ているのだから、自分の良心にしたがって正直に生きなさいというメッセージが込められている。

ネットで調べてみると、後漢の時代は賄賂政治が横行しており、官僚が出世するには上に賄賂を贈ることが一番の早道と言われていた。ところが役人・楊震は賄賂を渡そうとした王密という男に「誰も知らないということはないだろう。まず、天が知っている。地が知っている。それに、君も知っている。わしだって知っているではないか？（天知る、地知る、子知る、我知る、寧んぞ知るもの無しといわんや。）」と言ったところ、王密は楊震の言葉に恥じて引き下がったという。

一方、ジャン・バルジャンは自分の名を捨てて新しい地で成功し市長に任命されるまでになっていたときに、ある男が自分と間違っただけで捕らえられて裁判に掛けられていることを知る。もし自分がバルジャンだと告白すれば死ぬまで刑務所にいなくてはならない。また黙っていれば自分の良心は地獄に墮ちることになる。原作では彼が自分の住み処を出てか

ら裁判所に法廷に立つまでの苦悶の葛藤が延々と描かれている。

バルジャンがついに法廷で "Who am I? I'm Jan Valjean." と告げる場面は何度見ても私の胸を打つところであるが、その前に "My soul belongs to God, I know./ I made that bargain long ago. / He gave me hope when hope was gone. / He gave me strength to journey on. と語っているところから彼の良心を支えているものは「神」でありミリエル司教であることが分かる。クリスチャンではない私にはやはり「神」よりも「天」「地」の方が感覚的によりしっくりくるのであるが、洋の東西を問わずに共通した人間の生き方を感じる。

2.4. <英語の神様> に憧れた私

当時の私の高校には何人かの名物教師がいた。「輪中」の権威と言われた地理の伊藤先生。気に入らないと自分の板書を何度でも書き直す癖があった。次は、教科書は無視して独自の史観を朗々と語った日本史の稲川先生。いつもは3年理系クラス担当なので「実害」はないのだが、この年はやむなき事情で文系の担当となり私は受験科目を世界史にせざるをえなかった。さらには、登山家として著名な生物の高木先生。私は大きなあくびをするのを見られて注意されたことを思い出す。そして英語科には「英語の神様」と言われた大場先生がいた。

大場先生は「英語に関しては知らないことがない」と言われた先生だった。3年生のときに文法を教えてもらったが、「これをやれば全ての問題が解ける」と言って「発音とアクセント」に関する独自の冊子を配布された。「-ate で終わる単語は2つ前の母音にアクセントがくる。ただし例外は・・・」というのは特に印象に残っている。また大場先生には「自分の子どもをデパートに連れていったのだが、自分はずっと本を読んでいて子どもが迷子になった」という「伝説」もあった。

私の父は師範学校を出ていたが、私が高校の教員になりたいと言うと昔の高等師範学校にあたる広島大学がいいのではないかと言った。しかし私は「高校の英語の先生」よりもむしろ「英語の神様」の方に憧れていたので、大場先生が卒業した大阪外大英語科に入りたかった。幸いにも当時の国立大学は一期校と二期校に分かれていてどちらも受験することができ、しかもどちらの試験科目も4科目だった。理科が不得手であった私にとって「英数国社」受験はまさに天恵であった。

2.5. ビリから二番目の名前

受験の結果は広大に落ちて外大に受かった。広大に落ちたときはそこよりも難易度が高い外大は受かるはずはないと思って私立大学の入学オリエンテーションに出席していたのだが、合格通知が届いた。私はその電報を握りしめてすぐに大阪行きの列車に乗った。合格者名簿には確かに自分の名前があった。しかし私の名は後ろから2番目に書かれていた。

最初は五十音順だと思ったのだが、最初の方を見てみると明らかに「あいうえお順」とはなっていない。そのとき私はこの名簿は入試の成績順になっているのではないかという不

安に襲われた。ビリから二番目に受かったのかも知れない、勉強について行けるだろうか——私はそんな恐怖にも似た不安を感じながら大学生生活をスタートすることとなった。

しかしこの名簿の謎はほどなく解けた。クラスの座席がこの名簿順になっており級友のひとりがアルファベット順だと教えてくれたのだ。ファリシー先生の会話の授業で私を助けてくれていた隣の席の山崎君に「自分がビリ 2 じゃないかと心配してたんだ」と話す。「君がビリ 2 なら僕はビリケツになるじゃないか。変な勘違いするなよ」と言われた。Yama-zaki は合格者名簿で Yama-da の後にあったのだ。

3. 大学時代

大学の英語科の授業の思い出をいくつか書く。最初は英会話の授業から始め、それから英作文、音声学、英文学の授業について記述する。

3.1. 初めて外人を笑わせる

米人教師ファリシーさんの授業はいつもこんなふうが始まった。Where's the fire?— It's on the fifth floor. / When's the party?— It's at four thirty. のようなやりとりが先生と学生の間で行われる。つまりは、[z] [ð] [θ] [f] のような子音を練習をするのである。私はなかなか思ったように舌が動かずに苦勞していたが、隣の山崎君はいつも歯切れが良くこの英文を発音していた。しかしこれも今になってみると、強弱のリズムで読んで[z] → [ð] と続くところは前の音を脱落させれば結構うまく発音できることに気がつく。当時の私はこの二つの音 [z] [ð] の両方ともを出そうとしていたに違いない。

こんなこともあった。この授業では「アメリカ口語教本 Spoken American English (中級)」(研究社) というテキストを使っていて、それには特定の文型を使って英作をする練習問題が載っていた。1 年生のときはこの授業は朝一番にあったのだが、あるとき「現在進行形」を用いた英文を作りなさいという問題があった。I am breathing now. とか We are learning English now. (40 年近く前のことなのでこの英文は推測である) のような答えが出されていってついに私の番になった。私は Mr.Ikeda is sleeping now. という文を言った。するとファリシー先生は「ハハ！」と声を立てて笑った。この英文は私が英語を使って初めて外人を笑わせた記念すべきものとなった。どうしてファリシーさんが笑ったかという、池田君は遅刻の常習者でこのときもまだ教室に現れてはいなかったからである。(彼は出身県のなまりを隠さずに話す青年で純朴という形容詞がぴったりだった。彼ともう一人の級友と一緒に夏休みに白馬岳に登ったことがあるが、そのときは彼の実家に泊めてもらった。いまでも年賀状のやりとりがある数少ない大学の友人のひとりである。)

3.2. 「トゥエンティトゥスリー」の謎

次にイングリシ先生の授業のことについて書く。この先生は元 BBC のアナウンサーで腹式呼吸で声が出て来るためだろうか、その声はとてもよく教室に響いていた。彼は英会話のテキストは使わずに BBC でかつて放送されたラジオ番組のスク립トを教材に使ってみんなに分担して演じさせていた。まずはお手本で読んでくれるのだが、さすがうまい。

たまに読み間違えたり詰まったりすることがあると「ヒュー」と言ってからまた最初から読みなおしたものだ。そのテキストの中には英語の歌や有名な演説も含まれていて毎週その会話の授業が楽しみだった。パトリック・ヘンリーが米国独立のときに行った有名な演説 *Give me liberty, or give me death!* (自由を与えよ、しからずんば死を!) のさわり 5 行ほどをプレゼンしたときは先生は私のスピーチを褒めてくれたことを覚えている。またテスト課題は自分たちで好きなスキットを選んで演じることだったが、私は友人の一人とペアを組んでセサミストリートのアーニーとバートを演じて好評を博していた。

こんな思い出もある。あるときのこと、イングリシ先生は授業の終わりに私ともう一人の級友に後で資料を取りに自分の部屋に来るように言った。そのとき先生は取りに来る時間を「トゥエンティトゥスリー」と言ったので私はその言葉を耳に刻みつけた。しかし後でよく考えてみると「22 時 3 分」なんてことはあり得ないことに気づいた。もう一人の級友とも相談してお昼休みに先生の部屋に伺った。それは「トゥエンティ・トゥ・スリー」だった。私は「3 時 20 分前」のことを英国式では *twenty to three* と言うことを学んだ。

3.3. 我が名はローイ

私はこのイングリシ先生の授業は楽しくて大好きだったので、その当時はあまり気にはならなかったのだが、いま考えてみるとかなり変なことがこの授業では行われていた。彼は全ての学生に英語の名前を割り振っていたのである。私の名は **Roy** であった。姓はない。ただの **Roy** である。つまり私たちは教室では英人(米人)の「こども」だった。こだわりすぎと言われるかもしれないが、いま私は自分の名前が **YAMADA, Shoji** とへボン式で綴られることにすら抵抗感を感じる。だから名刺にもメルアドにも **Syouzi** を使っている。ましてや **Shoji YAMADA** (名・姓) などは論外である。

ところが当時の教室では私の名前はその「部品」すら無くなっている。「創氏改名」どころか「廃氏改名」されて完全な「別人」にされているのである。「英語で授業を」と言っている人たちが今度は「英語の名前で授業を」などと言い出さないか私は危惧している。なにしろ「トウイック」だけでは満足できずにさらに「トウフル」を導入するなどと言っているような人たちなのだから。(蛇足：彼らはそのうちに受験料が払えない人は「アイフル」の特別低金利ローンがあります、などと言い始めるかもしれない。彼らにとって大事なのは子どもたちの教育ではなく、自分たちのお金儲けなのだから。)

(なお、名前の表記の順序や表記の方法については拙著『授業は発見だ』(p.92)の中でも触れている。授業で使う名札の記述をどうするかで ALT や同僚の教師と話し合った経過やそれぞれの言語にはそれぞれの「文字と約束」があることが書かれている。)

3.4. 「そんなものは使わなくとも…」

この節からは 4 人の先生—英会話担当のグプタ先生、英作文担当の金山先生、音声学担当に船坂先生、英文学担当の船坂洋子先生の思い出を書く。それぞれ短いエピソードであるが順に紹介していく。

英会話担当のグプタ先生はインド出身の方で、フルネームは「ディレッシュ・チャンドラ・グプタ」だった。受験で詰め込んだ世界史の知識がまだ頭に残っていた私には何とも神々しい響きに聞こえた。「こんなことは他の誰も教えてくれませんよ」が先生の口癖で、様々な英語表現を日本語と対比させながら私たちに教えられた。それゆえ授業はほとんど日本語でなされていた。ときどき眠くなる時があったが、オアシスのようなホッとする時間だった。母語話者の教師であっても英語を使わずに授業をする例として書き残しておきたい。

英作文の担当の金山先生は1年生のときの最初の授業で入試答案について話されたことが印象に残っている。先生は **make it a rule to** (～することになっている) という熟語を例に出されて「君たちの英作文の答案をみるとこのような熟語をそのまま使う人が多いが、よく意味を考えればそんなものは使わなくても **always** で済むんですよ」と言われた。英作文力は「日本語を日本語に言い換える力」(寺島・寺島美 2004) であることをすでにこのとき私は学んでいたのである。「何でもいいので1つの話を全て英訳してくる」という夏休みの課題に取り組んだときにも私はそのまますぐに英語にせず原文をまず自分の知っている英語に置き換わるような日本語にしてから英訳したことを思い出す。

3.5. 美味しい単語は忘れない

音声学担当の船坂先生の授業は LL 教室で行われた。いつも授業の始めに短いディクテーションがあって答案を出すのだが、私はあるときに「土曜日」の綴りを間違えて先生から「こんな書けないでどうするんですか」と言われたことがある。高校の入試の前にはしっかりと覚えたはずだったが、高校のときは書いたことがなかったからであろう。「使わないものは忘れる」という典型例である。たしかに **Saturday** は日本での日常生活の中でお目にかかることはない。あっても腕時計の中の小窓にある「**SAT**」ぐらいだろう。生活の中で使う機会がなければ単語テストなどをいくらやっても「ざる水」効果(CC: 寺島) しか発揮しないということが私の経験からも立証されている。(なお、CC については「<http://kigouken.jimdo.com/>幾つかの注意事項/」を参照ください。)

このことを逆に言えば、単語テストなどやらなくてもその単語を使う機会があれば覚えているということである。私は大学の第2専攻でドイツ語を学んだが使わないのでほとんど覚えていないが、一方でフランス語を第2専攻した家人の口からはたくさんの仏語が出てくる。しかも意味も言えるから驚きである。「ペイザン」「ラ・メゾン・ド・ブランシュ」「ル・スリジェ・ダ・ムール」「プチ・ブローニュ・ドゥーブル」「スール・ミニオン」「ラ・パン・アジル」……。参考までに言うと、最初のはパン屋、次の4つは洋菓子店で、最後のはフランス料理店である。美味しい単語は忘れないのである。

3.6. いくら縁が無いとはいえ…

英文学担当の船坂洋子先生(音声学担当の船坂先生の奥様)でもひとつ思い出がある。とても美しい方で授業中わたしはいつも見とれていたが、あるときテキストを音読されて

いるときに grew を「グリュー」と発音された。正しくは「グルー」なのだが、このとき私は大学の先生でもこんな基本的な単語の発音を間違えることがあるのかと驚いたことを覚えている。ただ、いま同じ立場にいる自分のありさまを見てみるとそれほど驚くようなことではなかったと当時の不明を恥じている。

ところが最近わたしは自分が英語どころか肝心の日本語すら忘れ始めていることに気づくようになった。板書の際に漢字が出てこないのである。先日もフレーズ訳を板書していて「儲ける」「稼ぐ」が出て来ずに冷や汗をかいた。いくら自分に縁がない単語とはいえ経営学部の学生を教えているのであるからこれくらいは書けなくてはいけない。先にまとめた別の原稿の中で私は学生の日本語力低下の問題を指摘したのだが、子どもたちの日本語力を低下させている社会的環境の影響からは大人も逃れられないのである。

4. おわりに

「中学以前」から書き起こした私の英語史であったが、途中から突然 30 年後の教師時代に話が飛んでしまった。しかし広瀬先生と阿部先生のごことは書いておきたかった、また、以前にいくつものエピソードを書いて、もう書くことはないだろうと思っていた「大学時代」についても新たな思い出が次々と浮かんできて書き記すことになった。

それにしても、自分と英語との関わりを思い起こして記述していくだけで、これほどいろいろなことを考えさせられるとは思いませんでした。「家庭における父親の役割」「社会構造を見抜く力」「思春期のこどもの気持ち」「人間の良心の拠り所」「自分の名前の大切さ」「教師の日本語学力」などは英語とは直接には関係ない問題ばかりである。

最後に一言するならば、私の人生のほんの短い期間をふり返っただけなのに、私はいろいろな人と出会って様々のことを学んできたことが分かる。感謝したい。私の教師生活はあと何年と数えられるほどになってしまっているが、研究員として追求したい課題がまだいくつもあるので最後まで努力したい。よろしくご指導をお願いします。(2013/07/18)